『ジョウゼフ・アンドルーズ』の語りについて

雲　島　悦　郎

目　次

はじめに
第1章　「作者」と歴史家
第2章　語り手（「作者」）の特徴
第3章　ブービー夫人について
おわりに

はじめに

ヘンリー・フィールディング（Henry Fielding）の作品『トム・ジョウンズ』（*Tom Jones*, 1749; 以下*TJ*）(1)の語り手は「全知の語り手」（omniscient narrator）の例としてよく引き合いに出されるが、(2)*TJ*の語り手が「全知の語り手」であるなら『ジョウゼフ・アンドルーズ』（*Joseph Andrews*, 1742; 以下*JA*）の語り手も、*TJ*の語り手と非常によく似ているので、やはり「全知の語り手」と呼べるであろうか。*JA*の序文で「この種の書物が従来わが国語において試みられた例を私は知らない」① と述べ、「散文による喜劇的叙事詩」（comic Epic-Poem in Prose）というジャンルの創始者を自負する「作者」がそのまま作品の語り手でもあるなら、確かに語り手は作品の世界について全知であるだろう（作品の外の実際の作者と区別して「作者」と表記する―但し作品からの引用文の場合を除く）。(3)ところが、語り手は―*TJ*の場合同様―しばしば自分の全知を否定する内容の発言をする。

第1巻第1章や第3巻第1章などで自分の作品を歴史あるいは伝記と主張する人物も序文の「作者」と大体同じ存在だと考えられる。しかし、この「作者」が歴史家あるいは伝記作者として作品中の虚構世界（物語世界）の出来事等を具体的に語り出すと（本論ではこの段階の「作者」を語り手とも呼ぶ）、途端に全知とは矛盾するような発言をし始める。例えば、実質的には物語の冒頭部分にあたる第1巻第2章で「作者」（語り手）は、「その先祖［ジョウゼフ・アンドルーズの先祖］について我らも鋭意調べてみたが、その曽祖父以上にはさかのぼることができなかった」② （I, ii; 上17;本論における下線は全て筆者による）と述べ、更にこの件に関して「われらの有能な一友人の伝える一つの墓碑銘」③（I, ii; 上17）なるものに言及し、その友人の推測を付け加えるなどしているが、自分で鋭意調べてみたり、友人の憶測に頼ったりするようでは、とても全知の存在とはいい難い。(4)また、そのようなことができるためには、語り手は物語世界に対して超越的な存在ではなく、物語世界とつながる世界の存在でなければならない（「存在領域の同一性」とか「同質物語世界内的」とかいう表現は使わないでおく）。

また、語り手は信頼性という点でも大いに怪しい。語られた事柄が「信頼できる」（authentic）かどうかということがこの作品では大きな問題になっているが、ジョウゼフを襲った後でつかまった強盗が閉じ込められた部屋から逃げると、見張りをしていたサックブライブ（Suckbribe：収賄者ぐらいの意）という名の人物が賄賂をもらって逃がしたのではないかと噂されるとき、語り手は次のように言う。

> しかし作者はこれら数多くの論難にもかかわらず、彼の無罪を確信する。仔細はかくかくしかじかと彼自身の口から直接聞いた人たちの積極的保証があるからだ。最上無二の証拠は当人のいうこと、これが今様の見方というもので

ある。④（I, xvi; 上 110; ここの「作者」は原文では“I”）(5)

引用文中の「彼自身の口から直接聞いた人たちの積極的保証がある」という部分は「作者」（語り手）が物語世界の人物と接触したことを暗示するが、当人（「彼自身」）の言い分を直接聞いた人の保証があるからといって、間接的に聞いたことをそのまま信じると言う人物の語ることが全面的に信ずるに値するだろうか。このような言葉を聞けば読者は当然用心して掛からなければならない。（一方、一つ上のレベルでは、これらは戯れの言葉であって、「今様の見方」などへの皮肉がこめられていると考えられる。）(6)

実のところ、「作者」には二重性のようなものが認められるし、「作者」と部分的に重なる語り手にもそれが影響する。そして語り手が語ることと実際に物語世界で展開していることのズレが作品の面白さを生み出している。(7)このような「作者」あるいは語り手の特徴に注目しながら、作品の語りと、聴き手・読者に求められている役割について考える。

第１章 「作者」と歴史家

この作品が発表された当時は、虚構の作品を実話のように装って発表する例が少なからずあったようだが、*JA* の場合は決してそうではなく、むしろ虚構作品であることをはっきり打ち出している。(8)優れた小説論として高く評価される序文中の有名な「散文による喜劇的叙事詩」論で、「作中の全ては『自然の書』から写されている」⑤とか、「自然に忠実であらねばならない」⑥とか言い、「自然の正しい模倣」⑦とか「自然の正確な模写」⑧という表現を使って、「作者」は自分の作品が自然（nature）を写したものであることを強調するが、その自然とは決して実際の世界（現実世界）ではなく、可能性と普遍性から成り立つ世界である。そして人物についても、「作者」は自分の観察経験に基づいてはいるけれども、現実の人物そのまま描くのではなく変えて描いていると述べる。

このように自然を写したこの虚構の書は、前述のように、序文では「散文による喜劇的叙事詩」と呼ばれるが、作品の本体ではむしろ伝記あるいは歴史と見做される。第１巻第１章は「伝記一般、特に『パミラ』について―あわせてコリー・シバーその他につき一言」⑨と題されるが、そこで「作者」はプルータークやネポスを歴史家ではなく伝記作家と呼び、life（伝記）と history（歴史／物語）をほぼ同義に使う。そして、伝記の中の悪い見本として強く意識される作品の代表格が『パミラ』（*Pamela*）とコリー・シバー（Colley Cibber）の自伝である。そして、「作者」は前者について、「信ずべき（authentic）文書記録の類から材料（lights）を借用する歴史家（historian）によって、我らに伝えられている」⑩(I, I; 上 15）と述べた少し後で、自分が読者に提供しようとしている作品 *JA* のこともまた「信ずべき（authentic）この歴史（history）」⑪（I, i；上 15）と述べる。(9)

コリー・シバーの作品とは『コリー・シバーの生涯に関する弁明』（*An Apology for the Life of Mr. Colley Cibber, Comedian, and Late Patentee of the Theatre-Royal*）と題される自叙伝であるが、「アンドルーズ女史のそれ」⑫とは S. リチャードソンの『パミラ』のことで、この作品は実際は虚構の作品であるけれども、作者がこの作品を発表した時に、自分が編集者として実在の人物パミラの手紙をまとめたように装ったので、それを実録物の伝記扱いするのである。

そして、*JA* の「作者」は上記の二作品が本人自身によって書かれたものでありながら、嘘・偽りが多く、とても信ずべき（authentic）ものと言えないのに対し、むしろ作中の主人公にとっては他者である自分が歴史家としてまとめた *JA* の方が信ずべきものだと主張したいと思われるが、「作者」（歴史家）の二重性の故に実際に語られたものには信じがたいところが多々あって、そこがまた面白いのである。

第３巻第１章は章題が「序の章　伝記礼讃」（CHAPTER I　*Matter prefatory in Praise of* Biography）となっているが、ここでも「作者」は歴史と伝記の両方について触れ、その中で、歴史書とは名ばかりで実はロマンスのようであり、伝記とは異なって、人間の行動とか性格については余り信じがたい（not quite

so authentic）ものがあると述べる一方で、伝記作家としての立場から優れた伝記の例としてセルバンテスの『ドン・キホーテ』を挙げ、セルバンテスを歴史家（historian）と呼ぶ。そして、「自然あるいは歴史より何らの援助を受けずに、絶対に存しなかった、また存せぬであろう人物を描き、絶対に起こらなかった、また起こりえぬ事実を記録する」⑬ ロマンスやノベルの類の作者たちとは違って、「自然を写すことに満足している」⑭ 作品の例として再度『ドン・キホーテ』に触れ、この作品はマリアーナの作品などよりもっと歴史の名に値すると述べる。それは「後者がある特定の時期、特定の国のみを扱っているのに対し、前者は世界一般に通用する歴史である」⑮(下 17)からだと述べる。

その後、作者は以上の考えを自分の作品に当てはめて、作中人物を作品外の実在の人物と誤解しないように読者に注意して、自分が作品で描くのは「人ではなく風習である、個人ではなく種族（種）である」⑯ と言ってから、次のように述べる。

> というと、人あるいは問うであろう、それらの諸人物は人生からとってくるのではないかと。それはそうにちがいない。いやそれどころか、余は余自身の眼でみたところよりほかは筆にしないと断言してもよい。［作品に登場する］かの弁護士は現代に生きているのみならず、過去 4 千年にわたって生きてきた。将来とても神は何千年の生命を彼に許容されると思う。あの弁護士は一職業、一宗教、一国家に限って生きてきたのではない。人生劇場の舞台に最初の卑劣な利己主義者が登場して、自己を全宇宙の中心とし、同胞を援け護るためにみずからいささかの苦痛も負わず、いささかの危険をも招かず、いささかの金銭も捨てまいとしたとき、そのときわれらの弁護士は生まれたのである。そして余の描いたような人物がこの地上に生存するかぎり、彼はそこにとどまるであろう。されど、彼がどこやらの卑小な名も無い男にたまたま一、二の点で似ているからといって、たとえば職業などが似ているからといって、そういう人間を真似せんと努めるもののごとく想像することは、この人物に敬意を表するゆえんではない。⑰（下 17-18）

この部分は、作者が序文でも言及するアリストテレスの『詩学』で、詩人と歴史家について述べられている部分と重なっているけれども、興味深いことに、表面上は齟齬するところがある。

> ……詩人（作者）の仕事は、すでに起こったことを語ることではなく、起こりうることを、すなわち、ありそうな仕方で、あるいは必然的な仕方で起こる可能性のあることを、語ることである。なぜなら、歴史家と詩人は……歴史家はすでに起こったことを語り、詩人は起こる可能性のあることを語るという点に差異があるからである。……詩作はむしろ普遍的なことを語り、歴史はむしろ個別的なことを語るからである。（アリストテレス『詩学』）⑩

JA 中の先程の言葉が「散文による喜劇的叙事詩」を書く詩人の立場から述べられているならばアリストテレスの言葉と全然矛盾しないが、歴史家として述べているので齟齬が生じてしまうのである。しかし、*JA* に於ける歴史家は先ずセルバンテスが歴史家だという意味での歴史家であって、「世界一般に通用する歴史」を書く歴史家であり、それはアリストテレスのいう意味での歴史家ではなくて、アリストテレスのいう意味での詩人である。そして、*JA* の「作者」は、過去 4 千年にわたって生きてきて、将来も何千年生きていくであろう利己主義者の普遍的な姿を捉えると同時に、「現代」に生きている個別の利己主義者の姿も描くという二重の役割を課されている。そして、アリストテレスのいう「実際にあったこと」「個別的なことがら」を語る任務を引受ける歴史家の役を、*JA* においては語り手と重なる「作者」が務めていると考えられる。*JA* では実際に物語が語られ始めると、詩人という意味での歴史家が途端にアリストテレスのいう意味での歴史家になっていくのである。

作者のペルソナとも呼ぶべき「作者」が実際に目にした人物は序文で original と呼ばれるが、序文や本文で文学を論ずる「作者」は本人がいう意味での歴史家であり、アリストテレスがいう意味での詩人であるので、original そのものを描くのではなく、「歴史の中で現代に生きているのみならず、過去 4 千年にわ

たって生きてきた、将来とても神は何千年の生命を彼に許容される」人物―即ち、彼のいう人物の雛形（pattern）―を先ず捉えなければならない。そして、この雛形と呼ばれるものは普遍的（universal）な存在であり、「作者」が第１巻第１章で伝記に関連して、「教訓（precepts）よりも実例（examples）が心に深い感銘を与える」[18] と言うときの precepts につながっており、「作者」は人物の雛形を実例、即ち個別の作中人物として描かなければならない訳だが、その段階の「作者」は物語世界とつながった世界に存在しており、自分の調査等に基づいてその世界の歴史を書いていく、アリストテレスのいう意味での歴史家であって、この段階の「作者」―呼び方を変えない―が作品の語り手の役を務めていることになる。

JA がセルバンテスの『ドン・キホーテ』を手本としているのはその表題紙にある “Written in Imitation of the Manner of Cervantes, Author of *Don Quixote*” という言葉にも明らかであるが、その『ドン・キホーテ』では、作者あるいは語り手の多重性が認められるそうである（無論、本物の作者はセルバンテスに他ならないが）。[11] フィールディングの場合はそれほど明確ではないけれども、少なくとも上述のような形での「作者」の二重性が認められる。*JA* の「作者」は序文や各巻第１章（第４巻第１章は除く）などでは現実の作者に限りなく近いけれども、この「作者」が物語を語る段になると、その性格が異なってきて、作品外の作者からは一層離れ、広い意味での物語世界の人物として虚構化されているように見える（その場合、その「作者」が語りかける「読者」もまた実際の読者とは違う虚構化された読者と考えられる）。序文で author と自称する人物から離れ、物語世界とつながる世界に存在する虚構化された段階の「作者」即ち語り手―we とか I として語る人物―が調査に基づいて登場人物に関して書いた歴史すなわち伝記が*JA* の物語である。

第２章　語り手（「作者」）の特徴

「作者」あるいは歴史家（伝記作家）は明らかな登場人物として表舞台に姿を現すわけではなく、登場人物の住む世界とつながる世界にいて、登場人物のことを調査して読者に報告する役割を果たすことのできる人物であるが、登場人物と明らかに接触したり連絡をとったり、場合によっては、登場人物と同じ場所に居合わせていると思わせる場合もある。

以下、この歴史（物語）の「作者」（語り手）を調査者・報告者として示す表現の実例を列挙する（朱牟田訳の「作者」は原文ではほとんど “we” や “I” である）。

> 「しかし二人とも会話の内容をどうしても話してくれないので、これを読者に伝える由もないのである」[19]（II, xv; 上 284）/「作者が本人にできるだけ思い出してもらった全部である。作者はできるだけ本人の言葉でほとんど文飾を加えずにお伝えしたのである」[20]（III, vi; 下 96）/「この話はおおむねアダムズ氏から聞いたのだが……もしわれらがこの家の召使の一人から情報を得なかったなら……このへんの話は惨憺たる不完全さに終わったにちがいない。……いくつかの（彼らのいわゆる）悪戯が晩餐中に演ぜられたことは認めねばならぬが、われらもついにそれを知る由もなかったのである。……次にかかげるのがその写しであるが、これを手に入れるには非常な苦労を要したのである」[21]（III, vii; 下 111）/「もっともその後復讐を思い立ったという話を聞かない」[22]（III, xii; 下 157）/「我ら［作者］は八方苦心の末、ようやく信頼するに足る一枚の写しを手に入れた」[23]（IV, v; 下 194）/「仮に作者にそれができるとしても、この二人の紳士の間にかわされた会話をお伝えすることは不要であろう。聞くところによれば、もっぱら競馬の話だったとか」[24]（IV, v; 下 198）/「ウィルソン氏が最近作者に寄せた手紙によると……」[25]（IV, xvi; 下 301）

そして、このような語り手（「作者」）は調査が不十分だと、推測に頼らざるをえないし、はっきりとしたことが分からない場合もあるので、次のような発言が出てくる。

「はっきりしたことはわからぬが」[26]（I, xv; 上 104）/「ことによると頭の中には別の悪戯を考えながら」[27]（III, vi; 下 106）/「この言葉がブービー夫人になにがしかの影響を与えたかどうか……私にもはっきりと言えない」[28]（IV, i; 下 176）(12)

上のような言葉をまともに取るなら、既述のように、「作者」は物語世界の歴史（作）家・伝記作家として資料を収集して物語・歴史・伝記を書いていることになり、その限りでは決して全知とは言えない。

しかし、実際に作品の語りを聴いていると、多くの箇所で語り手は登場人物の心中まで分かっているような語り方をするので全知だと思わせるが、それは根底で物語世界の真実に通じた上位の「作者」ともつながっているからだとも言えるし、丁度、歴史小説の作者が実際には見たことも聞いたこともない人物の言動をまるで傍で観察してきたかのように書く場合と同じだとも言える。

また、作品では物語を語ること自体について触れられる。そして、「作者」は自分の作品の歴史の面より伝記の面を強調して（伝記をつかさどる神への呼び掛けまである[29] [III, vi; 下 101-102]）、伝記においては他の歴史物などのごとく事件の正確な連鎖にしばられることはなく、「作者」が必要と判断する事柄から順に語られていくと言う。そして次のように自分が語る内容を選んで語っていること明らかにする。

「そのようなわけで作者は、一つの事実をこれまで少しもにおわせなかったのであるが、それもどうやら説明の必要が生じたらしい」[30]（I, xi; 上 71）/「このことはたいしたことでもないと思って前には書かなかったのであるが……予告もなしに突然諸君にそういう文章を読ませることはわれらのいさぎよしとしないところである。」[31]（II, v; 下 92）

そして作品で一番問題になるのは、自分の物語を「信ずべき」歴史と「作者」は言うけれども、作品を読んでいくと、この「作者」の言うことは首尾一貫しないこともあり、「作者」の語る事柄を細かく吟味すると、その信頼性はかなり怪しく、読者は注意して掛からなければならないと気付かされることである。そして、「作者」が「この事件に関していかなる見解を持とうとも、それは読者の勝手にまかせる。私としてはただ次の事実さえ報告すれば十分である」[32]（II, xv; 上 288）などと言うとき、作品の外の作者が実際の読者に、「作者」の言葉を鵜呑みにせず、想像力を働かせて物語世界の真実を推測するのを促していると考えられる。そして、作者フィールディングが理想とする読者のモデルは「作者」によって「賢明な読者」（sagacious Reader など）と呼ばれるものに近く、不完全な語りの背後にある真実を把握するためには、「作者」が「我らの筆より読者のご想像が一段とゆきとどきもし、また早くもあろう」[33]（IV, xvi; 下 297）と言うように、読者は想像力を存分に働かせる「賢明な読者」になろうと努めなければならず、「普通の読者」（common reader）（II, I; 上 139）(13)にとどまってはいけないのである。

「賢明な読者」などへの言及には、他に次のようなものがある。

「賢明な（judicious）読者諸君……注目する労を惜しみ給わぬように……」[34]（I, vii; 上 45 頁）/「賢明な（sagacious）読者に説明の要もあるまい」[35]（I, vii; 上 49）/「この物語を読んで二章先を予知しうる読者は、けだし非凡な（sagacious）読者である」[36]（I, xi; 上 71 頁）/「多少とも観察力ないし経験のある読者ならば……推測が付くであろう」[37]（I, xviii; 上 136）

登場人物のアダムズは彼の顕著な特性である simplicity を発揮して、人の言うことを言葉通り信じる「単純な聞き手」であるが、ついつい「作者」の言葉に騙されてしまうような「普通の読者」は「単純な読者」とも呼べそうである。

また、「作者」が「彼は何度も頭を下げたのち、（いや、実をいうと）たった一度頭を下げようと何遍も努力したのちに、帰って行った」[38]（IV, ii; 下 183）などと言うとき、語りが騙りになっていく契機のような

ものが見て取れる。

そして、「作者」もある意味では「単純な観察者」として、上辺の事実を読者に伝えるが、読者は簡単に騙されないように、想像力を働かせた積極的な読みをしなければならないし、「作者」がちらつかせる小さな手掛かりによって真相に迫ることを求められているが、その種の具体例を作品の主人公ジョウゼフの誘惑者ブービー夫人の言動やその表情・顔色に焦点を合わせて示すことにする（小間使いスリップスロップの言動にも注目する）。

第3章　ブービー夫人のこと

作品の舞台は、田舎、ロンドン、田舎へ向かう道中、そして田舎と移るが、最初の田舎の部分とロンドンの部分を導入部として一緒にすれば、作品は大きく三つに分けられる。そして、ロンドンの部分と最後の田舎の部分はブービー夫人のジョウゼフへの横恋慕が大きく取り上げられるという点で対称的になっている。ブービー夫人はロンドンでのジョウゼフに対する誘惑に失敗して一旦は諦めたかに見えながら、実は諦めきれずにジョウゼフを追って田舎に戻り最後の悪あがきを見せる。

ジョウゼフを誘惑するのはブービー夫人だけではなく、小間使いのスリップスロップもそれに負けまいとするかのようにジョウゼフに迫る。語り手（「作者」）が「賢明な読者」に向かって「ブービー夫人の優雅にして教養ある精神に働く情欲の作用と、スリップスロップの粗野にして卑俗なそれとの相違」[39]（I, vii; 上45）に注目するように言うように、二人の誘惑は対照的に描かれている。(14)

「散文による喜劇的叙事詩」論で述べられているように、作品では「滑稽なるもの」（the ridiculous）の唯一の根源である気取りの原因とされる人間の虚栄・偽善、とりわけ偽善を暴くことを主眼とする。そして、作品中でもっとも注目すべき偽善者はブービー夫人で、彼女は世間体とか世間の評判だけは気にするが、本当は色欲に突き動かされる好色極まりない女である。そして、主人公のジョウゼフやアダムズなどとは違って、まさに裏表のある人物だけに、その描写は作者の腕の見せ所である。特にブービー夫人のように裏のある人物の描写では、描写にも裏があり、読者は裏に秘められた人物の動機を察知しなければならないが、それは往々にして性的なものである。(15)そして、人物描写は主として外面描写になる。人物の言動を描きながら、その内面を推し測らせてその偽善性を暴いていくのである。読者は想像力を働かせて作品の自然な理解に努めなければならないが、特に紛らわしい外面的（行動）描写を通して人物の意図・動機を推察する必要がある。(16)

サミュエル・ジョンソンはリチャードソンとフィールディングについて、「二人の間には時計の仕組みがどうなっているか知っている人間と、文字盤の読み方を知っているだけの人間との違いほどの開きがある」(17)と言ったが、必ずしもそうではなく、フィールディングは時計の文字盤を示しながら時計の内部の動きを読者に想像させる手法をとったと言えるところがある。そして、それは特にブービー夫人の動き・表情の描写について言える。

ブービー夫人の誘惑が本格化するのは彼女の夫が亡くなってからであるが、誘惑の気配は既にその前から見られる。ジョウゼフが競馬の騎手を務めたとき、買収の誘いを退けたという噂を夫人が耳にして彼のことが気に入って自分付きの下僕とした、と語り手は言うが、ブービー夫人の人柄からしてこの理由は俄かには信じられない（ジョウゼフの美貌に魅かれた夫人がジョウゼフの人柄を口実にして自分の近くに置いただけだともとれる）。

そして、ロンドンに出てからは彼女の誘惑の意図が行動にはっきり表れるが、それが皮肉をこめると同時に、非常に皮相的に描写される。

> 奥方は今は朝の散歩にも彼を連れてハイドパークに行く。そして疲れると（といってもほとんどはじめから終りまでそうなのだが）、彼の腕にもたれて非常になれなれしく話をかわす。馬車から降りるときはきまって彼の手につか

まるし、時には躓かぬようにとその手を強く握りしめる。朝は寝床の傍らまで呼び寄せて用向きをいわせる。食卓では色目を使う。その他上流の婦人にありがちな、ちっとも名前に傷はつかない程度の罪のないなれなれしさでなんとか彼を甘やかそうとするのだった。[40]（I, iv; 上 30）

上の引用文中の「疲れると（といってもほとんどはじめから終りまでそうなのだが）」にも作品の語りの特徴がよくあらわれていて、夫人が疲れているように言いながら、括弧内の事実でそれを否定している。

そしてジョウゼフが「奥方から許された特権以上には少しも進出しようとしなかった」ので、彼女は「彼が依然自分に対して非常な尊敬の念を持っているためと解し、彼女が胸に抱きはじめたある感情をますます高めるばかりの結果」[41]（I, iv;上 32）だったとあるが、上述の理由で「抱きはじめた」という表現はいささか不正確である。

彼女の夫の死後その誘惑は本格化するが、ジョウゼフもまた本格的に誘惑と闘うことになるので、旧約聖書のヨセフを読者にはっきり意識させるために、ここで彼の呼び方が愛称のジョーからジョウゼフと変えられる。ブービー夫人の誘惑は旧約聖書のヨセフを誘惑する女主人のようにあからさまではない。そして、何事にも世間体とか体裁を重んじる彼女が夫を亡くした時のことが次のように語られる。

夫に先立たれて力を落とした奥方は、家に引きこもってまったく外に出ず、まるで自分が重病に取りつかれたようであった。最初の六日間、気の毒な奥方はスリップスロップと三人の女友達しか自分の部屋に入れなかった。この連中は集まってトランプをしたのである。[42]（I, v; 上 33）

前半の表現はいかにもブービー夫人が夫の死を悲しんでいたかのようであるが、まったく事実誤認であることは、ジョウゼフの姉パミラ宛の手紙の中の「旦那様が死んでくれればよいと奥様がいわれるのを、僕は一千遍も耳にしました」[43]（I, vi; 上 38）という表現を俟たずとも、引用文の後半の表現によって明らかである。このように、最初は読者に嘘を伝えながら、後でそれを覆すような事実を伝えるのがこの作品の語りの顕著な特徴である。

そして、夫の死後七日目になると、ブービー夫人はジョウゼフに茶器を自分の寝床まで運ばせ、寝床に寝たままで「偶然わが手を彼の手にのせて」[44]（I, v; 上 33）―フィールディングの作品では「たまたま」とか「偶然」という表現には往々にして裏がある―彼に恋をしたことがあるか尋ね、本格的に誘惑を開始する。そして、ジョウゼフとの会話の途中で、言葉で誘うだけではなく「寝床の中で半身を起こし、雪よりも真っ白な首のあたりをあらわに」[45]（I, v; 上 35）したりして、あの手この手で誘惑をするがことは思い通りに運ばない。

この後、小間使いのスリップスロップもブービー夫人と張り合うように彼を誘惑するが、彼女の誘惑もロンドンに来るよりも前に始まっていたと考えられる。同じ邸に勤めていた、ジョウゼフの恋人ファニーがスリップスロップに追い出されたのも、ファニーの美貌に対する嫉妬からで、「絶世の美貌が禍したのであろう。他に理由は考えられない」[46]（I, xi; 上 72）と語り手は―全知ではないが故に―理由を推測してみせるが、それは半分しか当っておらず、ジョウゼフを自分のものにするにはファニーが邪魔だから追っぱらったと想像できるはずである。スリップスロップは女主人が偽善者の典型であるのに対して、虚栄家の典型であり、彼女がやたら難しい言葉を使って間違える癖（マラプロピズム）もそのあらわれであるが、その姿の醜悪さとジョウゼフとの齢の差にも拘わらずジョウゼフをものにできると思っているのもやはりその顕著なあらわれである。（ブービー夫人が自分の色香でジョウゼフの心を奪うことができると考えるのもやはり虚栄心のなせるわざである。）[18]

そして、ジョウゼフが邸の女中に手を出しているというスリップスロップの嘘を真に受けて、ブービー夫人はジョウゼフに暇を出すから必要な手続をするようにスリップスロップに命じて彼女を自分の部屋から出したものの、決断がつかずスリップスロップを四たび呼び戻すが、これについて「奥方の気持がかくも動揺

するのを見ては、おそらくこの奥女中の頭にも、ぴんとひびくものがあっただろうが、それは賢明な読者（sagacious reader）に説明の要もあるまい」[47]（I, vii; 上 49）と語られる。

そして、語り手はブービー夫人のことを、「この奥方はわれらが物語の女主人公（the heroine of our tale)」[48]（I, viii, 上 51）であって、その名声の保護をするのは自分の任務であると言いながら、この偽善物語の女主人公の本質を読者の―想像する―眼に露わにしていく。

夫人は再度ジョウゼフを傍らに呼ぶと、スリップスロップから聞いたジョウゼフの不品行に触れながら、「何気なく」（carelessly）（I, viii; 上 54）自分の手を彼の手に重ねるのである。しかし、この誘惑の過程で、ジョウゼフが「私の操」（my Virtue）とか「彼の家庭（家族）の操」（the Chastity of his Family）などと口にすると、夫人は驚愕のあとは激怒してジョウゼフに仕着せを脱がせる決断をする。

解雇されて夕方 7 時には邸を出たジョウゼフは、暫く迷ったあとで即刻そのまま旅立つ決意をするが、語り手はそこで、「あながち月の光に誘われたばかりではないが、目から鼻へ抜けるような賢い人物（conjuror）でない読者にその辺りの想像はよもやつくまい」[49]（I, v; 上 70）と言って、次の章でその種明かしをするのである。

ジョウゼフが急いでロンドンを旅立ったのは、実は愛する女性が田舎に住んでいたからだ。以前はサー・ジョン［トマスの間違い］の邸で養われていたファニーという娘だが、ジョウゼフたちがロンドンに出る少し前にスリップスロップのために追い出されてしまった。そして、後に、ジョウゼフたちが一緒に田舎に帰る途中でファニーとスリップスロップは出会うが、その時スリップスロップはファニーを完全に無視する。これについて、「この物語の中で一つでも不自然に思われるふしがあることはわれらの本意ではないから、ここに彼女のとった態度のよってきたるところの説明を試みよう。……最も詮索好きな読者（most curious reader）をも満足させるように説明できると信じて疑わない」[50]（II, xiii; 上 262）と言って、語り手はスリップスロップの行動の理由を二人の身分の違いのせいにして、もっともらしく「身分高下の論」を長々と展開するが、要するにスリップスロップのファニーに対するよそよそしい態度の主な理由は身分の差などではなく、恋敵への憎しみに他ならないと読者は理解すべきである。そして、スリップスロップがのちにジョウゼフを自分と同じ馬車に乗せようとするが、彼がファニーと別々に行くこと嫌ってそれを拒んだときのスリップスロップの態度にそれがはっきりと見られる。

> ついにジョウゼフが動かしがたいのをみてとると、［スリップスロップは］馬車に身を投じて、どこか芝居のクレオパトラがオクタウィアになげるような目つきをファニーに与えざま、行ってしまった。本当をいえば、彼女はファニーの出現で、腹の煮え返るほど失望したのである。彼女は、最初にジョウゼフを例の旅籠にみいだしたときから、居酒屋あたりでも結構なしとげられそうなあることの希望を抱いていた。アダムズがこの夜手ごめの危険から救ったものは、決してファニーだけではなかったのかもしれない。[51]（II, xiii, 上 268-69）

ここでやっと語り手は本当のことを言うが、ここにはスリップスロップのファニーに対する激しく根深い嫉妬が明瞭に描かれている。（まさかジョウゼフがスリップスロップに手篭めにされるおそれがある訳はないが、面白く語ろうとすると作り事になる傾向を示している。）

ブービー夫人はジョウゼフを解雇した後、ロンドンから田舎の邸に帰る途中で、ジョウゼフに出会うが、夫人はひどい偽善者ではあるけれども、無表情を装うという点では未熟で、作品の他の箇所で出てくる、「……うわべは少しも笑わなかった。おのれの筋肉を完全に支配しうる力があり、顔にはいささかも見せずに腹の中で笑うことのできる男」[52]（III, vi; 下 117）(19) ほどの筋金入りではないので、「ジョウゼフを見るなり夫人の顔は赤く輝いたが、やがて見るまに真っ蒼になった」[53]（IV, I; 下 169)。「赤く輝いた」のはジョウゼフの姿を目にしたからであるが、「真っ蒼になった」のは周囲の状況から読者が夫人の心理状態を想像しなければならなく、それはジョウゼフの近くにファニーがいたからだと判断される。すると、語り手自身はそれまでどこでも触れなかったが、ジョウゼフとファニーが特別の仲であることを夫人は既に知って

いたか、そうでなければその時に勘付いたことになる。

その後、ブービー夫人は田舎の邸に帰ってからも、語り手ははっきりとは言わないが、ジョウゼフのことを思い続ける。そして、あるとき、

> 彼女ははっとして眠りからさめた。心は空しい妄想に燃えるようであった。夫人の眼はたまたま昨日は本物のジョウゼフが立っていたそのほうへむいたが、このちょっとした偶然が彼の姿をまざまざと彼女の記憶の中に呼びさました。[54]（IV, i; 下 171）

ここの「たまたま」も「偶然」もそのままの意味には取れない。そして、ジョウゼフの姿を目に浮かべるときのブービー夫人の複雑な心境が「その想像の中のぼろをまとった彼の姿を、怒りと喜びと軽蔑とからなる微笑を浮かべて眺めるのであった」[55]（IV, I; 下 173）と語られる。

そして、語り手は、ブービー夫人が田舎に帰ったことについて、「［ジョウゼフへの思いの］征服を完全なものにするために、即座に田舎に引きこもろうという、賢明というより、むしろ平凡な決心をしたのである」[56]（IV, I; 下 176）などと言うが、これはとんでもない的外れの説明で、ブービー夫人はジョウゼフを諦めきれずに田舎まで追ってきたのである。(20)

そして、このような見当違いの語りの圧巻は田舎の教会の礼拝にブービー夫人が出席したときに見られる。

> 彼女が到着した翌日は日曜日だったので、夫人は教会へ行った。従来たいして規則正しく教会へきたこともなかった奥様が、旅から帰る早々教会に姿をみせたのだから、誰も彼も驚きいぶかった。ジョウゼフもやはりきていた。なんでも夫人は牧師のほうよりも、彼のほうばかりじっと見ていたということだが、これは単に悪意の噂にすぎないと思う。祈祷が終わったとき、アダムズ牧師は立ち上がって［ジョウゼフとファニーの結婚予告をするが、それが］夫人になにがしかの影響を与えたかどうか、そのとき彼女はまだ自分の席にいたのだが、そこは一般の会衆からは見えないようになっていたので、私にもはっきりとはいえない。しかし、ものの十五分もすると夫人は立ち上がって、婦人席になっている教会の一角に眼を走らせ、そのあとのお説教の間じゅう、しつこくじろじろと見つづけ、その顔も怒ったようなこわい顔だったので、たいていの婦人連はなにか自分たちのしたことがご機嫌にさわったのだろうかと心配したことだけは、間違いのない事実である。
>
> 邸に帰るとすぐ夫人はスリップスロップを部屋へ呼んで、ジョウゼフというあの無礼な男はなぜまた村にもどってきたのだろうといった。それにたいしてスリップスロップは、街道で彼を連れたアダムズに逢ったことや、ファニーにからむ例の冒険などを物語った。その話を聞いて夫人はしばしば顔色を変えた。[57]（IV, I; 下 177）

「これは単に悪意の噂にすぎないと思う」と言うが、否定的に述べながら、それが事実であることを示すのはフィールディングの作品の特徴的な表現である。「そこは一般の会衆からは見えないようになっていたので、私にもはっきりとはいえない」と言う部分は、語り手がここで物語の登場人物に急接近し、一般の会衆の席から夫人の様子を観察しているような印象を与える（語り手が単に一般の会衆の視点から描いているに過ぎないという見方もあるだろうが）。そして、ブービー夫人が婦人席を怒ったようなこわい顔でじろじろと見続けたのは、そこにファニーがいたからだと想像しなければならない。

さっきの場面でジョウゼフが「なぜまた村にもどってきたのだろう」ととぼけたことを言って本心を隠そうとしたブービー夫人は、ここに至ってもジョウゼフのことを諦め切れずに、偽弁護士スカウトの手を借りてもジョウゼフとファニーの結婚を阻もうとする。

> 以前ならば夫人もこのような男と口をきくことはまさかなかったであろうが、ジョウゼフへの恋慕と、可憐で純真なファニーに対する嫉妬と憎悪とが、彼女をしてわれにもあらずこの男を相手に親しげな口をきかせてしまった。話

の中で夫人は迂闊にも、スカウトがねんごろな仲のスリップスロップからかねてほのめかされていた噂を裏書するようなことになり、そこにつけ込んで彼はファニーについてああいうひどい嘘をいうことにもなったのである。これらのいきさつは、もしここで読者にお話し申しておく労をおしんだとしたら、さだめし読者は、なぜあんなひどい嘘をいったのか説明できないかもしれない。[58]（IV, iii; 下 189）

ここでは、語り手はブービー夫人を突き動かしているものが「ジョウゼフへの恋慕と、可憐で純真なファニーに対する嫉妬と憎悪」に他ならないことを認めている。また、偽善者ブービー夫人がスリップスロップの愛人スカウトにつけこまれている事実は、なかなか皮肉が効いている。

それから、ブービー夫人の召使が夫人の甥ブービー氏夫妻の来訪をつげると、夫人は客を応接室に通すように命じ、自分も「できるだけ表情を整えて」[59]、これで二人の結婚も少なくとも当分はできないだろうし、自分にはスカウトというすばらしい手先がいるのだから、どんな決心でも実行する機会があるわけだと考えて多少満足しながら、いそいで応接室に行き、甥から「叔母様、これがあの有名なパミラです。噂はきっとお聞きになっておいででしょう」[60]（IV, iv; 下 192）と、ジョウゼフの姉パミラを紹介されるが、ここでリチャードソンの『パミラ』とフィールディングの『ジョウゼフ・アンドルーズ』の物語世界がはっきりとつながる。

その後、ブービー夫人は自室でスリップスロップとファニーのことを話題にした後でジョウゼフの話に移る。その中で、スリップスロップが「……ですから私が仮に奥様のご身分でジョウゼフ・アンドルーズさんが好きだといたしますと、私はあの娘を一刻もこの村に置きません。奥様がぜひとおっしゃれば、スカウト弁護士がきっと巧く追っぱらってくれるでしょう」[61]（IV, vi; 下 210）と言う。すると、スリップスロップの最後の言葉が夫人の心に衝撃を与えるが、その様子が次のように語られる。

彼女はスカウトが彼女の秘密を洩らしたのではないか、いや、ひょっとしたら彼女自身が秘密をさとられるようなことをしたのではないかと思った。それでしばらく黙っていると、その顔ははじめ蒼く、次には赤く二度色を変えたが、やがてこういった。「おまえの口のしまりのなさには呆れるねえ。なにかい、あの男のことで私がスカウトに頼んであの娘を陥れようとしたとでもいうのかい」[62]（IV, vi; 下 211）

夫人の顔が「はじめ蒼く、次には赤く、二度色を変えたが」の部分は、彼女の不安や怒りを表していると思われるが、正確に言い当てるのは難しい。

邪恋に狂ったブービー夫人は皆と食卓に着いたときも何も食べず、他の者より早く自室に引き取り、「恋慕と憤怒と絶望」[63]（IV, xiii; 下 266）とに苛まれて寝台に身を投げ出して激情を爆発させるが、この憤怒の主たる対象はやはりファニーに違いない。やがて、スリップスロップがやってきて、加減を尋ねると、「ジョウゼフの美しさと立派さを長々と褒めたたえ、ああいうやさしい男がファニーのような卑しい女に投げ与えられるのはもったいないことだ」[64]（IV, xiii, 下 266）と言う。すると、スリップスロップは、ダイダッパーがファニーを気に入って拉致すると言っているから、自分も加勢すると言って夫人を慰める。そして、スリップスロップが出て行くと、夫人はジョウゼフへの恋慕と自分のプライドの葛藤を吐露する芝居じみた独白をするが、その中でファニーのことを「世にも卑しい性悪な女、考えるさえ汚らわしい女」「あんな情けない女」などと罵倒し、「あの憎らしいお転婆が私の軽蔑するあの美しさを、舌なめずりしてむさぼるのはたまらない」[65]（IV, xiii, 下 269）とファニーに対する敵愾心を露にする。しかし、その直後、自分の欲情に打ち克ったと神と自分の理性に感謝した途端、スリップスロップが大急ぎで戻ってきて、見知らぬ男がファニーとジョウゼフが実は兄妹だと打ち明けたと伝えると、夫人の決意は揺らぐ。しかし、ジョウゼフたちが兄妹だというのは間違いで、二人の本当の素性が明らかになると、後はとんとん拍子に二人は結婚に漕ぎ着け、さしものブービー夫人も諦めざるをえない。

そしてジョウゼフたちが結婚すると、ブービー夫人は「あれから二、三日してロンドンに帰ったが、騎兵

隊のある青年士官や、明けても暮れてものトランプ遊びにまぎれて、まもなくジョウゼフを思いだすこともなくなってしまった」[66]（Iv, xvi; 下 301）と語られる。作者フィールディングは男女の真の愛には相互の尊敬と感謝（特に尊敬）が欠かせないと考えていたが、[21]ブービー夫人がジョウゼフに寄せる感情は尊敬や感謝とは無縁のものであり、だからこそ、いとも簡単にジョウゼフのことを忘れるのである。こうして、物語の舞台の後景にいたブービー夫人を主人公とした小さな物語が閉じられる。

この物語の語りにも明らかなように、語り手は往々にして事実と異なることを述べる傾向がある。しかし読者が登場人物の行動の裏にある心理を考えながら読んでいけば、事柄の真相に迫ることは容易である。

また語り手がはっきりと語らないことを読者が読み取るようになっている。アダムズたちは田舎に帰る途上で、同じく田舎のブービー邸に乗合馬車で向かうスリップスロップに先ず出会う。それから、暴漢に拉致されていくファニーは偶然自家用馬車で通りかかったブービー家の執事ピーター・パウンスに助けられるが、彼もまた田舎に帰るところである。この時点では二人が何故田舎に向かうのか読者には分からないが、彼らに続いてブービー夫人が田舎に向かうのを知り、更に彼女がそうする理由を知った後では、彼らの帰還が違った様相を呈してくる。

ジョウゼフが解雇されて邸を出されるまでは、ブービー夫人の内心の葛藤が詳しく紹介されるが、ジョウゼフが出ていってからは夫人の動きについてはしばらく語られない。しかし彼女のジョウゼフに対する激しい恋慕の念はその後も一向におさまらず、自分の恋を成就するために終にはロンドン滞在を切り上げてジョウゼフを追って田舎に帰ることにしたのであり、ただそれだけのためにスリップスロップやパウンスがブービー夫人よりも一足先に田舎に向かい、更に他の使用人たちが夫人と一緒に田舎に帰ったという実態が浮かび上ってくる。

おわりに

作品中で物事を偽るのはブービー夫人のような偽善者だけではない。例えば、善良な女主人公のファニーでさえもジョウゼフへの思いを隠そうとしてアダムズに嘘をつく。すると、二人の間柄を知っているアダムズは「……お前は真実を隠しているか、それとも立派な男を偽っているかだ」[67]（II, x; 上 239）と言って、ファニーにジョウゼフに関する出来事を語って聞かせるが、それに対する彼女の無数の反応で彼女の情熱の真相は分かるはずなのに、「相手の言葉どおりにしか意味を汲みとることのできぬアダムズ」[68](II, x; 上 239) には分からない。また、そのようなアダムズでさえ意図せずして人を騙してしまうことがある。彼がトラリバー牧師のことを同じく神に仕えるものという意味で「兄弟」と呼んだとき、宿屋の内儀のみならずジョウゼフやファニーもトラリバーのことを文字通りの兄弟と誤解する。

文書で語られることにも嘘がある。シバーの『生涯に関する弁明』やリチャードソンの『パミラ』などの「自伝」もその例で、読者は注意して掛からないと騙されてしまう。フィールディングは『パミラ』の「嘘」を『シャミラ』で暴いて見せて、真実を語ることの必要性を説いているが、本人ではなく第三者が書いた物語も必ずしも信用できない。いかなる物語もどこかで嘘をついてしまうもので、作者はそういう物語の限界も意識しているかもしれない。そして、書かれた事柄の真実を把握するには、人間性の理解に基づいた読者の積極的な読解が必要だと作者は考えているようである。

JA の場合も、語り手の言葉通りにしか作品を理解しないと物語世界の「全的真実」を把握することができないようになっている。フィールディングの作品の語り手の語り口の特徴はよく “with tongue in cheek”[22]という言葉で表わされる（この言葉の定義は *OED* では “with sly irony or humorous insincerity” となっている）。語り手が本気かどうかは舌の動きによる表情の変化を想像するしかないが、時には判断を誤ることもあって、語り手が本気で自分は事実の調査者・報告者であるという意味のことをいくら言っても、従来これを冗談ぐらいにしか受け取らない向きがあったのではないかと思われる。だが、あれだけ頻繁に口にするのだから、もっとまともに受け取ってよいはずである。そして、語り手をあまり信頼しない

で、語りの裏にある真実を読み取るように心掛けなければならない。

作者フィールディングは登場人物のこまごまとした心理描写はしないが、登場人物の言葉や行動を通してその心理を読者に想像させようとする。それと同時に、ブービー夫人やスリップスロップの場合は、彼女らのファニーに対する敵愾心や嫉妬の心理を前提にして、語り手が述べる皮相な見解とは異なった、彼女らの言動の真の動機を読者に理解させようとする。また、語り手が偽善者の登場人物の代弁者となって、登場人物の嘘をそのまま自分の言葉として、まるで客観的真実かのように読者に伝える面があり、これに騙されない「賢明な読者」の読み方を読者は求められている。(23)

注

（1）作品からの引用（和文）は朱牟田夏雄訳のヘンリー・フィールディング『ジョウゼフ・アンドルーズ』（岩波文庫）から（訳文の一部を必要に応じて変えている）。

昨年度、下関市立大学の公開講座で市民と共にこの翻訳を読み、更に今年度は基礎演習の授業でもこれをテキストとして使ったので、本論もこのような市民や学生に読んでもらいたいと思っている（各引用文の後のカッコ内には作品の巻・章と訳本の冊・頁を示している）。また、本論の注の後に原文の引用文を載せておく（テキストはWesleyan Editionを用いる）。

（2）E.g., see Gerald Prince, *Dictionary of Narratology* (Lincoln & London: University of Nebraska Press, 1989), 68; Shlomith Rimmon-Kenan, *Narrative Fiction: Contemporary Poetics* (London and New York: Methuen, 1983), 94-95; ジェラール・ジュネット『物語のディスクール―方法論の試み』（書肆風の薔薇、1985）、218.

（3）作品の序文も作品あるいはテキストの一部として本文と同様に扱う。

James Cruiseは作者と語り手に関連し、“...first, he [Fielding] creates an authorial presence immediately in his text by virtue of his preface; and second, in the narrative that follows, he stations a narrator whose remove from direct narrative action shields him from the ambiguity that plagues Pamela, the upstart and sole author of her history.”（下線筆者、以下同じ）と述べるが、このように序文等に於ける「作者」と物語本体の語り手を区別する点は拙論の考え方に近い。J. Cruise, “Precept, Property, and ‘Bourgeois’ Practice in *Joseph Andrews*,” *SEL* 37 (1997), 535.

実際の作者から実際の読者までの区分についてはS. Chatmanの次の区分を基本に考える（Seymour Chatman, *Story and Discourse* [Ithaca, New York: Cornell University Press, 1978], 152. 上下線に挟まれない部分は物語[narrative]の外部）。

Real author ⇢ Implied author → (Narrator) → (Narratee) → Implied reader ⇢ Real reader

Rimmon-KenanはChatmanの上の区分のうちimplied authorとimplied readerをcommunicationという観点から除く（Rimmon-Kenan, 86）。

フィールディングの作品の語りについては、I. Watt、R. S. Crane、W. Booth、J. Preston、W. Iserなどの考え方に関するBellの解説が参考になる。See Ian A. Bell, *Henry Fielding: Authorship and Authority* (London and New York: Longman, 1994), 15-35.

ジュネットは*TJ*の「物語世界外の語り手は、完全に作者と合致する」が、この語り手を「「現実」の作者」ではなく、「作者＝語り手」とし、「暗黙の作者」あるいは「暗黙の語り手」とも呼ぶ。ジェラール・ジュネット『物語の詩学―続・物語のディスクール』（書肆風の薔薇、1985）、141、147。

Rimmon-Kenanは、語り手が語られる物語（story）より上位にある“exradiegetic”の場合の例の一つとして*TJ*を挙げ、また語り手が物語中に登場しない“heterodiegetic”の場合の例の一つとしても*TJ*を挙げている。Rimmon-Kenan, 94-95.

しかし、拙論では、*TJ*の語り手とほぼ同じ特性を有する*JA*の語り手が物語の中に姿を現したかに見える一場面を指摘している。

（4）H. Amoryは、フィールディングの作品の三人称の語り手は作者が登場人物の内面に関する全知を否認するのに使う装置の役割があるという。Henry Fielding, *Jonathan Wild*, ed. Hugh Amory (Oxford: Clarendon Press, 1997), 163, n. 1 .

シュタンツェルは、「いかなる＜局外の語り手＞といえども、初めは全知の語り手らしくふるまっていても、遅かれ早かれその知識の範囲は限定を受けることになる。あるいはフィールディングの小説に見られるように、ある人物、ある事件についての最終判定の能力が、一時的にこうした語り手から取り上げられるのである」と言い、更に W. フューガー（Füger）が「『ジョウゼフ・アンドルーズ』においては＜局外の語り手＞の全知が再三にわたり制限を受けるという考察から出発して」、この作品の知と無知の問題や「否認された語り手の知」の問題を扱っていると指摘する。前掲書 77、122。

なお、＜局外の語り手＞は英語版では "authorial narrator" となっており、「物語世界」（the world of the characters）の外の存在で、「全知の語り手」と意味が近い。また同書中の＜語り手的人物＞（teller-character）も同じような意味で使われている。

フィールディングの作品の語り手の全知を明確に否定するのは、Brian McCrea, "Fielding's 'Omniscient' Narrator: Romances, Newspapers, and the Voice of True History," in *Henry Fielding in Our Time: Papers Presented at the Tercentenary Conference*, ed. J. A. Downie（Newcastle upon Tyne: Cambridge Scholars Publishing, 2008), 303-13。McCrea は、シュタンツェルが触れるフューガーの論文の英語版、Wilhelm Füger, "Limits of the Narrator's Knowledge in Fielding's *Joseph Andrews*: A Contribution to a Theory of Negated Knowledge in Fiction," *Style* 38（2004), 278-89 に言及するが、残念ながら筆者は現段階ではこの論文を入手していない。

Regina Janes は神の如き "silent author" と "author-narrator" を区別して、語り手の全知に否定的である。R. Janes, in *ibid.* ed. Downie, 166.

（5）シュタンツェルは、三人称小説といいながら一人称で語り手（語り手である私）が語る例として『トム・ジョウンズ』を挙げる。M. シュタンツェル『物語の構造』（岩波書店、1989)、32。

（6）McCrea はこの部分はアイロニーが豊富で多面的であると述べている（McCrea, 308)。

（7）See Janes, 170.

（8）Andrew Wright, *Henry Fielding: Mask and Feast*（London: Chatto and Windus, 1968), 15, 19; Cruise, 537.

（9）"authentic" は、朱牟田訳では、引用⑩では「信ずべき」となっているが⑪では「よりどころのある」となっている（引用⑪は「よりどころのあるこの物語」と訳されている)。また、第 3 巻第 1 章（下 13）では否定形で「信がおけない」、第 3 巻第 8 章では「信憑すべき」と訳されている。キーワードをこのように訳し分けるのは問題がある。

（10）松本仁助・岡　道男訳『アリストテレース　詩学／ホラーティウス　詩論』（岩波文庫)、43。

（11）齋藤　文子「『ドン・キホーテ』の語り手たち」『シリーズ物語論 3 ―彼方からの声』（東京大学出版会、2007)、31-47。

（12）Amory は、Battestin がフィールディングのよく使う言い回しとして "Whether X, or Whether Y, I cannot determine; but certain it is...." のパターンを示し、それが使われている箇所を 109 指摘していると言い、このような場合に、三人称の語り手が一人称の語り手に変わると言う。Martin C. Bettestin, *New Essays by Henry Fielding*（Charlottesville: University Press of Virginia, 1989), 32, n.43; Henry Fielding, *Jonathan Wild*, ed. Hugh Amory（Oxford: Clarendon Press, 1997), 163, n. 1 .

（13）日本英文学会第 81 回大会のシンポジアム「コモン・リーダーは復権できるか―文芸批評と作品論」（司会：齋藤　衛）ではコモン・リーダーの積極的な評価がされたが（『第 81 回大会 Proceedings』146-48)、*JA* では否定的な意味合いで使われている。

（14）この「相違」に関連し、Andrew Wright は、"But the chapter title points the way to the humbler truth that affection in a waiting-gentlewoman is precisely comparable to that of a squire's lady, and that their affectations of difference are ridiculous."（Wright, 174）と言って違いに否定的であり、Sheldon Sacks も "...the similarity of the operation of the 'passion' of lust in lady and maid adds to our laughter at the expense of the proud Lady Booby...."（S. Sacks, *Fiction and the Shape of Belief: A Study of Henry Fielding with Glances at Swift, Johnson, and Richardson*［Berkeley and Los Angeles: University of California Press, 1966], 91）と違いを認めていないし、A. M. L. Costa も欲情と言う点では両者は同等だと言う（Astrid Massetti Lobo Costa, "Up and Down Stairways: Escher, Bakhtin, and *Joseph Andrews*," *SEL* 31［1991], 555)。一方、M. Golden は "Despite the irony―the moral difference between the two "operations" is only that between psychological and physical rape―the distinction is meaningful."（Golden, 78）と肯定的である。

（15）Paul Baines, "*Joseph Andrews*," in *The Cambridge Companion to Henry Fielding*, ed. Claude Rawson（Cambridge: Cambridge University Press, 1994), 57; Golden, 53.

(16) Golden, 18.

(17) Ronald Paulson and Thomas Lockwood, eds. *Henry Fielding: The Critical Heritage* (London: Routledge & Kegan Paul / New York: Barnes & Noble, 1969), 438: "...that there was as great a difference between them as between a man who knew how a watch was made, and a man who could tell the hour by looking on the dial-plate." なお、訳文は川口喬一『イギリス小説入門』(研究社出版、1989)、31 にあるものを用いた。

(18) Golden はブービー夫人の特徴をむしろ虚栄心と捉えている (Golden, 77-79)。

(19) フィールディングの作品 *Jonathan Wild* の主人公 Wild がまさに「この男」のような人物である。

(20) A. Wright は "It is amusing that Lady Booby, unable to conquer her passion for Joseph, should retire to the country to which he has gone, and be all the more inflamed when she sees him." (Wright, 69) と言うが、これは語り手の言葉をそのまま信じたことを示している。

(21) 能美龍雄他『十八世紀イギリス小説と結婚』(溪水社、2007)、108-109。

(22) S. Sacks はこのような語り手を serious commentator と ironic commentator の役割を果たす split commentator と呼び、"put tongue in cheek" という表現を使っている (Sacks, 70, 76)。

(23) Rimmon-Kenan も *Tom Jones* に関してこのことを指摘している (Rimmon-Kenan, 53)。

英語引用文

① ...this kind of Writing, which I do not remember to have seen hitherto attempted in our Language.

② As to his Ancestors, we have searched with great Diligence, but little Success: being unable to trace them farther than his Great Grandfather....

③ ...an Epitaph which an ingenious Friend of ours hath communicated.

④ But notwithstanding these and many other such Allegations, I am sufficiently convinced of his Innocence; having been positively assured of it, by those who received their Informations from his own Mouth. which, in the Opinion of some Moderns, is the best and indeed only Evidence.

⑤ ...every thing is copied from the Book of Nature....

⑥, ⑦ ...we should ever confine ourselves strictly to Nature from the just Imitation of which,....

⑧ ...the exactest copying of Nature...

⑨ Of writing Lives in general, and particularly of *Pamela*; with a Word by the bye of *Colley Cibber* and others.

⑩ [The other] is communicated to us by an Historian who borrows his Lights...from authentic Papers and Records.

⑪ ...The authentic History...

⑫ ...the Lives of Mr. *Colley Cibber*, and of Mrs. *Pamela Andrews*...

⑬ ...who without any Assistance from Nature or History, record Persons who never were, or will be, and Facts which never did nor possibly can happen:....

⑭ ...who are contented to copy Nature....

⑮ ...whereas the latter is confined to a particular Period of Time, and to a particular Nation; the former is the History of the World in general....

⑯ ...not Men, but Manners; not an Individual, but a Species...

⑰ Perhaps it will be answered, Are not the Characters then taken from Life? To which I answer in the Affirmative; nay, I believe I might aver, that I have writ little more than I have seen. The Lawyer is not only alive, but hath been so these 4000 Years, and I hope G— will indulge his Life as many yet to come. He hath not indeed confined himself to one Profession, one Religion, or one Country; but when the first mean selfish Creature appeared on the human Stage, who made Self the Centre of the whole Creation; would give himself no Pain, incur no Danger, advance no Money to assist, or preserve his Fellow-Creatures; then was our Lawyer born; and whilst such a Person as I have described, exists on Earth, so long shall he remain upon it. It is therefore doing him little Honour, to imagine he endeavours to mimick some little obscure Fellow, because he happens to resemble him in one particular Feature, or perhaps in his Profession;....

⑱ It is a trite but true Observation, that Examples work more forcibly on the Mind than Precepts:....

⑲ ...as I never could prevail on either to relate it, so I cannot communicate it to the Reader.

⑳ This was all of Mr. *Joseph Andrew's* Speech which I could get him to recollect, which I have delivered as near

as was possible in his own Words, with a very small Embellishment.

㉑ Mr. *Adams*, from whom we had most of this Relation...and indeed, had it not been for the Information which we received from a Servant of the Family, this Part of our History...must have been deplorably imperfect;... some more Jokes were (as they call it) cracked during their Dinner; but we have by no means been able to come at the Knowledge of them.

㉒ ...threatening a severe Revenge against *Joseph*, which I have never heard he thought proper to take.

㉓ ...of which we have with great difficulty procured an authentick Copy;....

㉔ It would be unnecessary, if I was able, which indeed I am not, to relate the Conversation between these two Gentlemen, which rolled, as I have been informed, entirely on the Subject of Horse-racing.

㉕ ...as Mr. *Wilson* informs me in his last Letter....

㉖ ...I never could with any tolerable Certainty discover which;....

㉗ ...perhaps having more Mischief of another kind in his Head...

㉘ Whether this had any Effect on Lady *Booby* or no, who was then in her Pew, which the Congregation could not see into, I could never discover

㉙ Now thou, whoever thou art, whether a Muse, or by what other Name soever thou chusest to be called, who presidest over Biography, and hast inspired all the Writers of Lives in these our Times:....

㉚ For this reason, we have not hitherto hinted a Matter which now seems necessary to be explained;...

㉛ A Circumstance which we thought too immaterial to mention before;...we scorn to betray him into any such Reading, without first giving him Warning.

㉜ I shall refer it to my Reader, to make what Observations he pleases on this Incident: it is sufficient for me to inform him, that....

㉝ The Reader may imagine much better and quicker too than I can describe....

㉞ ...a judicious Reader will give himself some Pains to observe....

㉟ ...not necessary to mention to the sagacious Reader.

㊱ ...he is a sagacious Reader who can see two Chapters before him.

㊲ ...every Reader of any Speculation, or Experience...may easily conjecture....

㊳ ...which he did with many Bows, or at least many Attempts at a Bow.

㊴ ...the different Operations of this Passion of Love in the gentle and cultivated Mind of the Lady *Booby*, from those which it effected in the less polished and coarser Disposition of Mrs. *Slipslop*.

㊵ ...would lean on his Arm, and converse with him in great Familiarity. Whenever she stept out of her Coach she would take him by the Hand, and sometimes, for fear of stumbling, press it very hard; she admitted him to deliver Messages at her Bed-side in a Morning, leered at him at Table, and indulged him in all those innocent Freedoms which Women of Figure may permit without the least sully of their Virtue.

㊶ ...Andrews, who never offered to encroach beyond the Liberties which his Lady allowed him. A Behaviour which she imputed to the violent Respect he preserved for her, and which served only to heighten a something she began to conceive....

㊷ ...the Death of Sir *Thomas Booby*, who departing this Life, left his disconsolate Lady confined to her House as closely as if she herself had been attacked by some violent Disease. During the first six Days the poor Lady admitted none but Mrs. *Slipslop* and three Female Friends who made a Party at Cards:...

㊸ I have heard her Ladyship wish his Honour dead above a thousand times:....

㊹ ...having accidentally laid her hand on his,....

㊺ She then raised herself a little in her Bed, and discovered one of the whitest Necks that ever was seen;....

㊻ ...she had been discarded by Mrs. *Slipslop* on account of her extraordinary Beauty: for I never could find any other reason.

㊼ This wavering in her Mistress's Temper probably put something into the Waiting-Gentlewoman's Head, not necessary to mention to the sagacious Reader.

㊽ ...this Lady, who is the Heroine of our Tale;....

㊾ ...the Moon, shining very bright, helped him to come to a Resolution of beginning his Journey immediately, to which likewise he had some other Inducements which the Reader, without being a Conjurer, cannot possibly guess;...

㊿ As we would not willingly therefore, that any thing should appear unnatural in this our History, we will endeavour to explain the Reasons of this her Conduct; nor do we doubt being able to satisfy the most curious Reader,....

51 ...at last finding *Joseph* unmoveable, she flung herself into the Chaise, casting a Look at *Fanny* as she went, not unlike that which *Cleopatra* gives *Octavia* in the Play. To say the truth, she was most disagreeably disappointed by the Presence of *Fanny*; she had from her first seeing *Joseph* at the Inn, conceived Hopes of something which might have been accomplished at an Alehouse as well as a Palace; indeed it is probable, Mr. *Adams* had rescued more than *Fanny* from the Danger of a Rape that Evening.

52 ...who indeed had not laughed outwardly at any thing that past, as he had a perfect Command of his Muscles, and could laugh inwardly without betraying the least Symptoms in his Countenance.

53 She no sooner saw Joseph, than her Cheeks glow'd with red, and immediately after became as totally pale.

54 She started from her Sleep, her Imagination being all on fire with the Phantom, when her Eyes accidentally glancing towards the Spot where yesterday the real *Joseph* had stood, that little Circumstance raised his Idea in the liveliest Colours in her Memory.

55 She...with a Smile composed of Anger, Mirth, and Scorn, viewed him in the Rags in which her Fancy had drest him.

56 ...in order to accomplish it [to conquer her passion] quite, [she] took a Resolution more common than wise, to retire immediately into the Country.

57 The Morning after her Arrival being Sunday, she went to Church, to the great Surprize of every body, who wondered to see her Ladyship, being no very constant Churchwoman, there so suddenly upon her Journey. *Joseph* was likewise there; and I have heard it was remarked, that she fixed her Eyes on him much more than on the Parson; but this I believe to be only a malicious Rumour. When the Prayers were ended Mr. *Adams* stood up, and with a loud Voice pronounced: *I publish the Banns of Marriage between* Joseph Andrews *and* Frances Goodwill, *both of this Parish*, &c. Whether this had any Effect on Lady *Booby* or no, who was then in her Pew, which the Congregation could not see into, I could never discover: But certain it is, that in about a quarter of an Hour she stood up, and directed her Eyes to that part of the Church where the Women sat, and persisted in looking that way during the Remainder of the Sermon, in so scrutinizing a manner, and with so angry a Countenance, that most of the Women were afraid she was offended at them.

The moment she returned home, she sent for Slipslop into her Chamber, and told her, she wondered what that impudent Fellow Joseph did in that Parish? Upon which Slipslop gave her an Account of her meeting Adams with him on the Road, and likewise the Adventure with Fanny. At the Relation of which, the Lady often changed her Countenance;....

58 With this Fellow, to whom a little before she would not have condescended to have spoken, did a certain Passion for *Joseph*, and the Jealousy and Disdain of poor innocent *Fanny*, betray the Lady *Booby*, into a familiar Discourse, in which she inadvertently confirmed many Hints, with which *Slipslop*, whose Gallant he was, had pre-acquainted him; and whence he had taken an Opportunity to assert those severe Falshoods of little *Fanny*, which possibly the Reader might not have been well able to account for, if we had not thought proper to give him this Information.

59 ...having composed her Countenance as well as she could....

60 ..."Madam, this is that charming Pamela, of whom I am convinced you have heard so much."

61 ..."...I am confidous if I was in your Ladyship's Place, and liked Mr. *Joseph Andrews*, she should not stay in the Parish a moment. I am sure Lawyer *Scout* would send her packing, if your Ladyship would but say the Word."

62 She feared *Scout* had betrayed her, or rather that she had betrayed herself. After some Silence and a double Change of her Complexion; first to pale and then to red, she thus spoke: "I am astonished at the Liberty you give your Tongue. Would you insinuate, that I employed Scout against this Wench, on the account of the Fellow?"

63 ...in the Agonies of Love, Rage, and Despair...

64 ...she entered into a long Encomium on the Beauty and Virtues of *Joseph Andrews*; ending at last with expressing her Concern, that so much Tenderness should be thrown away on so despicable an Object as *Fanny*.

⑥⑤ ...the meanest Wretch, a Creature below my Consideration....this despicable Wench...I will not suffer the little Jade I hate to riot in the Beauties I contemn.

⑥⑥ As for the Lady *Booby*, she returned to London in a few days, where a young Captain of Dragoons, together with eternal Parties at Cards, soon obliterated the Memory of *Joseph*.

⑥⑦ ...“...You either do not tell me Truth, or you are false to a very worthy Man.”....

⑥⑧ ...Adams, who never saw farther into People than they desired to let him....